

悠久の自然と歴史文化に育まれた世界遺産のまち スポーツ集客による交流人口増でにぎわい創出!!

観光都市・熊野市のもう一つの 顔・スポーツ集客のまち

紀伊半島の東南部（三重県南端）に位置し、市域東側が熊野灘に面する熊野市は、市域北側の一部と西側の中山間地がそれぞれ奈良県・和歌山県に接しており、市域南側も和歌山県と接している（南側の県境の一部は熊野川）。

紀伊半島の中でも和歌山県と熊野市を含む三重県南部周辺のエリアは、律令時代から紀伊国（きのくに）と呼ばれられるようになった。それ以前の国名は、降雨量が多く、森林が奥深く密生していることなどから派生した「木国（木の国・きのくに）」だったという。

現代においても、森林面積が市域の88%（三重県内の自治体の平均は約65%）、伐採可能な人工林率が71・9%（県平均約63%）にも達して林業が盛んな熊野市は、熊野灘に面す

る海の国（漁業の郷）であると同時に、木の国（林業の郷）の面目を保っている。

熊野市は周知のように、世界遺産・熊野古道（紀伊半島全域に張り巡らされた、熊野三山などの聖地を目指す参詣道の一部《紀伊山地の霊場と参詣道》／三重県・奈良県・和歌山県・大阪府にまたがる主要6ルートのうち、京都・大阪・熊野を結ぶ紀伊路以外の5ルートが世界遺産登録）の伊勢路エリアにも位置している。

また、リアス式海岸と白砂青松の砂礫浜が続く熊野灘沿岸部は、海峽などの峡谷美で知られる熊野川支流の北山川周辺と共に、吉野熊野国立公園の指定区域ともなっている。

こうした環境下にあるため、例えば熊野市内の熊野古道は、道そのものが海に面していたり、小高い尾根道や峠道からも海が頻繁に見え隠れするなど、海と山が混交した雰囲気独特の風情を醸し出している。

かわかみ かんじ
河上 敢二
熊野市長

神々が坐す豊かな海と山に育まれ、風光明媚な熊野市には、古来より伝わる独自の伝説・伝承の数も多い。

例えば、奇岩地帯が全長1・2kmも

続く鬼ヶ城（世界遺産・国の天然記念物および名勝）は、熊野市のリアス式海岸の特徴を代表する景観だが、ここは平安時代に鬼と恐れられた海賊・多娥丸の砦跡とされ、多娥丸は征夷大將軍・坂上田村麻呂に征伐



国の特別名勝にして天然記念物、神秘的なたたずまいの瀨峡（北山川／吉野熊野国立公園）



始皇帝の命で不老不死の仙薬を求め来日したとされる徐福を祀る《徐福の宮》周辺には、実際に天然の薬草も自生



延々と続く「鬼ヶ城」の奇岩帯（リアス式海岸）の中を細い道筋が通る世界遺産

されたとの伝説がある。また、日本書紀に登場する世界遺産《花の窟》（全長22kmの砂礫浜・七里御浜（世界遺産）沿い）は、国生み神話の主役の一人で、日本の神々の母といわれるイザナミノミコトの御陵（墳墓ともされる。鬼ヶ城より北側の楯ヶ崎には、《神武東征神話》において神武天皇が九州・日向から大和盆地を海路で目指した際の、紀伊半島への上陸地とする伝承がある。波田須地区の神社《徐福の

147万人の観光客が訪れていた。翌令和2（2020）年度はコロナ禍のため、観光入込客数はさすがに落ち込んだ（約94万人）が、それでも100万人近く訪れているのは、観光都市・熊野市の底力というべきだろう。

また、コロナ禍以降の観光産業の盛り返しは、令和4年10月11日から外国人観光客の受け入れ要件が緩和され、これらが正念場だが、ウィズコロナの体制が浸透したこともあり、人の流れが回復し始めているのは事実だ。熊野市の場合、それは熊野市の観光動態の一つの特色である《スポーツ集客》の回復傾向にも見て取れる。

《宮》は、秦の始皇帝に不老不死の仙薬（薬草）の採取を命じられ、薬草が生えているとされる《蓬萊島》を目指した、始皇帝の随臣・徐福の上陸地とされ、境内には《徐福の墓》もある。こうした上陸地伝説は、東シナ海方面から九州沖を経由し、現在も豊かな漁場を形成する黒潮（暖流）が、熊野灘沖をゆったり流れていることに起因するのだろう。

このような伝説・伝承に彩られ、年間を通じて温暖な気候風土、海・山・里の食の魅力、深い歴史を物語る豊富な文化財（国指定3件、県指定12件、市指定118件、世界遺産・熊野古道の構成資産12件）など優れた観光資源を有する熊野市には、コロナ禍直前の令和元（2019）年度を例に取れば、年間約



「熊野市では平成の初めのころから、スポーツの試合や合宿などで訪れる人たちが徐々に増え、全国高等学校総合体育大会が東海ブロックで開催され、熊野市がソフトボールの開催地になった平成30（2018）年度はスポーツの試合や合宿のために、熊野市で宿泊した《スポーツ宿泊者》は延べ4万人以上を数えました。観光入込客数も平成30年度は約160万人と近年では最高でしたが、年間宿泊者数は総計15万人前後だったので、スポーツ宿泊者数が延べ4万人以上を占めたのは、観光都市・熊野市にとっても非常に大きい成果といえます。

ところがコロナ禍が本格化した令和2年度は、開催を予定していたスポーツイベント35件のうち23件が中止になり、スポーツ宿泊者の数も約1万2000人に激減しました。それでも東京オリンピックが1年遅れで開催された令和3（2021）年の後半ぐらいから、



2022年度日本女子ソフトボールリーグ公式試合を前に、練習に励む選手たち(令和4年9月29日/くまのスタジアム)



年間を通じてソフトボールや野球のさまざまな大会、練習試合が実施される「くまのスタジアム」

(1981)年に農林水産省へ入省。途中、経済企画庁(当時)や外務省(在イタリア日本国大使館勤務も含む)への出向などを経て、平成10(1998)年6月に農林水産省を退職。

徐々にスポーツイベントも回復し、今年(取材は令和4年9月29日)は熊野市の《スポーツ集客事業》の象徴である、正月恒例《熊野ソフトボールキャンプ》も2年ぶりに開催できました。完全に旧に復するまでにはもう少し時間がかかりそうですが、明るい予兆を感じております」

そう語るのは、河上敢二熊野市長だ。熊野市出身の河上市長は、大学卒業後の昭和56

同年11月に実施された旧熊野市市長選に出馬し、当選した。

以来、旧熊野市と旧南牟婁郡みなみむろ紀和町きわによる平成17(2005)年11月1日の合併に至るまでの2期(2期目は実質約3年間)にわたり、旧熊野市の市長を務めた後、同年11月13日に実施された新熊野市発足に伴う市長選挙に出馬し、当選。令和4年11月で5期18年目を迎えている。つまり旧熊野市時代を含めれば、連続7期25年目の長きにわたり、熊野市政をけん引してきたことになる。

その河上市長が旧熊野市長に就任して最初期に行った施策の一つが、ソフトボールを軸とする「スポーツ集客事業」の基盤強化と、その効果を地域振興へ有機的に結び付けるための環境整備だった。

選手たちの情熱への感動が育んだ 《ソフトボールの聖地》

「熊野市には幾つかのキャッチフレーズがありますが、誰言うともなく《ソフトボールの聖地》とされるようになったのは、年間延べ3万人から4万人を数えるスポーツ宿泊者のうち、約7割が全国各地から熊野市を目指し、遠征して来てくださる、高校・大学・社会人などのソフトボールチームの選手や関係者で占められていたからです。例えば、令和3年夏に開催された東京オリンピックで、ソフトボールの女子日本代表チームは見事金メ



スポーツ合宿する選手たちの足腰の鍛錬の場としても人気の七里御浜(世界遺産・熊野古道)

ダルを獲得しましたが、あの代表選手たちもほとんどが、所属チームの合宿や大会、練習試合などのため、熊野市に幾度となく来訪しています」(河上市長)

熊野市とソフトボールとの関わりは、昭和40年代に日本体育大学ソフトボール部(男女)が熊野市で合宿を始めたことに端を発している。やがて、当時の日体大・男子ソフトボール部の選手だった長澤宏行しげゆきさんが高校女子ソフトボールの強豪校・夙川学院しゅくがわの指導者となり、昭和60(1985)年から熊野市での合宿を開始。バッテリー練習を中心に他校との練習試合なども行うようになり、熊野市では平成元(1989)年から《熊野バッテリーキャンプ》として正式に受け入れ開始。平成7

熊野市

(三重県)

市 政 ル ポ



横からの景観が獅子の顔に見える奇岩「獅子岩」(七里御浜／天然記念物・世界遺産・国指定名勝)

(1995)年からは実行委員会を立ち上げ、運営も行うようになった。それが現在も続く、毎年正月恒例の《熊野ソフトボールキャンプ》(平成18年)へと発展する。

「私がソフトボールを中心とするスポーツ集客に本腰を入れようと決意したのは、旧熊野市の市長に就任して2カ月後、平成11(1999)年1月のことでした。正月恒例の《熊野バッテリーキャンプ》(現熊野ソフトボールキャンプ／基本的に1月3日～5日までの2泊3日)は、通算11回目を数えていましたが、その様子を初めて目の当たりにした私は驚愕しました。

何しろ女子選手を中心に、中学生・高校生から社会人に至るまでの若い選手たち500～600人が、全国総体の優勝常連校である夙川学院の名将・長澤監督(当時)の指導を仰ぐため、正月早々、遠くは北海道や九州などからも熊野市に駆け付け、海風の吹き付ける真冬の海岸やグラウンドで、汗の湯気を上げるような勢いで一心不乱に練習しているのです。まるで武道の道場のような、すがすがしい雰囲気でした。私もスポーツは陸上競技や軟式野球など、若いころにいろいろ経験して

きましたから、この若い選手たちの情熱には心底驚くと同時に、感動もしたのです」(河上市長)

熊野バッテリーキャンプおよび熊野ソフトボールキャンプへの参加者は年ごとに参加者の数も年齢層も広がり、平成4(1992)年には約400人、翌平成5年には約500人、コロナ禍直前には参加者800～1000人規模のイベントにまで拡大していた。

熊野市は当初、そうした選手たちのサポートを、地元のソフトボール関係者と共に、できる範囲内で手伝っていた。しかし、参加者の急増に伴い、宿舎の手配や練習場の割り当て、医療面も含めた安全の確保など、さまざまな事務処理手続きも組織的に行う必要が生じてきた。そこで長澤監督との協議の結果、前述のような経緯で熊野市が主催者となり、《熊野ソフトボールキャンプ》の名称で参加者を全国公募、運営する現在の形になったのだ。



日本書紀では「日本最古の神社」とされる「花の窟神社」。天然の磐座(いわくら)をうがったような素朴な形式がとても神秘的



ご神体の磐座から転げ落ちたため、ご神体の一つとしてしめなわがかけられソフトボール選手たちの尊崇を集める丸い玉石(花の窟神社)

以来、コロナ禍の影響で令和3年正月のキャンプこそ中止になったものの、河上市長の談話にもあったように、令和4年正月から再開している(コロナ禍の影響を考慮し、参加者は400人限定)。この原稿を作成している令和4年11月半ば現在も、令和5年1月3日～5日まで開催する通算34回目の《2023熊野ソフトボールキャンプ》への参加者を募集中だが、今回の募集人数は令和4年より少し多い500人に設定されている(参加者資格は、小・中・高校生、大学生、引率者も含む一般成人)。

さて、市長就任直後に熊野バッテリーキャンプ(現熊野ソフトボールキャンプ)での若い選手たちの熱気に感動した河上市長は、競技力の向上を何より大事と考え、周囲がくつろいでいる正月早々、あえて熊野市に集まってくる選手たちのため、本格的なスタジアムの建設計画に着手。平成14(2002)年6月1日に、硬式野球とソフトボールの公式戦に

使える《くまのスタジアム》が開場した。

前述のように、それは《スポーツ集客》という新しい事業の基盤整備への本格的な着手でもあった。

スポーツ交流が推進する広域連携と持続可能なまちづくり

「くまのスタジアムの建設は、旧熊野市の前市長（西地茂樹氏）の時代に基本的な計画ができていましたが、着手には至っていませんでした。私はそれを引き継いで完成させ、さらにソフトボールを中心とする幅広い種目のスポーツ集客に向けた《拠点施設》の一つに位置付けたという形になります」（河上市長）

くまのスタジアム（収容人員6500人）のある山崎運動公園には、8面のテニスコート、サッカーやラグビーのグラウンドにも使用可能な多目的グラウンドがある。くまのスタジアム完成の翌平成15（2003）年には、ソフトボールと少年野球グラウンド2面が背中合わせになった健康運動広場ができるなど、多様なスポーツに対応できる各種施設の整備も着々と進められていった。

また、スポーツ集客という事業名でくくられているが、年間を通じておびただしい数の各種競技大会や練習試合が開催され、《熊野ソフトボールキャンプ》に代表されるスポーツ合宿なども盛んに行われている熊野市の「スポーツ交流都市」としての歩みを支える大



平均高齢化率44%超でも熊野市の高齢者は元気（高齢者サロンでの健康体操風景）

きな存在として、近隣市町との連携関係が挙げられる。

「例えば正月恒例の《熊野ソフトボールキャンプ》の際には、宿泊施設や練習場などの足りない部分はしばしば、近隣の尾鷲市^{おわせ}さんや御浜町^{みはま}さん、紀宝町^{きはう}さん、和歌山県新宮市^{しんぐう}さんなどをお願いして、割り振らせていただいております。同様に、例えば今年（令和4年）11月26日～27日に実施する、やはり恒例の《ベースボールフェスタ練習試合in熊野2022》においても、尾鷲市さんと新宮市さんに試合場や練習場を一部、お借りしています」（河上市長）

《ベースボールフェスタ練習試合in熊野》には毎回、高校野球の強豪チームが全国各地から集まる。スポーツマスコミの中には《秋の



熊野灘の沖合を流れる黒潮は天然の好漁場（熊野市では市民が海岸（七里御浜）からカツオを直接釣れるほど魚影が濃厚）

甲子園」と表現するケースまであるほどで、プロ野球のスカウト担当者にとっては、翌年のドラフトに向けた、貴重な視察の場との評価もある。

こうしたスポーツ交流の太い流れは、観光振興全般の基盤の一つでもある。しかし、「旧に復するための努力はするが、例えばソフトボールや野球を中心に、熊野市単独でスポーツ宿泊者を延べ5万人以上にするというような、いたずらな拡大は考えない方がいい」と、河上市長は冷静に捉えている。むしろ「近隣の市町との連携をもっと強め、三重県南部一帯に《ソフトボールの聖地》を拡大していく努力をした方が合理的です。併せて、海や山を活用したアクティビティの拡充を図るなど、他の種目やスポーツレジャーの受け入れ態勢

熊野市

(三重県)

市 政 ル ポ



ダム湖（小森ダム）のほとりにひっそり咲くクマノザクラ（平成30年に新種と認定された桜の野生種）の銘木・妙光桜



高齢化率70%以上の丸山集落で丁寧に維持保存され、日本一の棚田風景ともいわれる丸山千枚田（日本の棚田百選）

を少しずつ整えていき、スポーツ交流人口の裾野を広げていきたい。それは結果的に、スポーツ集客を軸にした観光振興のエリアの広域化につながるし、それができればおのずと、スポーツ宿泊者の数も適切に増えていくのではないでしようか」と河上市長。

また、海山に育まれた「神秘的な雰囲気や癒やしの風景」に満ち、清浄な空気や食の魅力に恵まれ、日本では熊野市にしか産出しない那智黒石（高級基石や庭石、装飾品などに最適な粘板岩）や、新姫（熊野市で発見された新種の柑橘）、クマノザクラ（平成30年に発見された、紀伊半島南部原産の新種の桜）などの《オンリーワンの魅力》にも満ちた熊野市の持つ奥深い環境は、働き方改革の一つの理想形とされる《ワーケーション》の好適地にも見えてくる。

だが、これについても河上市長は、いたずらに外部からの企業誘致やワーケーションに無理のない形の模索を図りたい、と冷静に語る。

「地元紙に先日、東京から熊野市に初めて出張で来られた方の投書が載っていました。その方いわく『地元の居酒屋に何軒か立ち寄ったら、どこの店も料理がおいしくて感激した。店員さんや、たまたま居合わせた地元のお客さんたちが何ともゆったりした雰囲気、優しく親切なことに、さらに感激した』というのです。市長としては地域振興のため、さまざまな施策・事業を行います、基本的にはこうした雰囲気を壊してまで、いたずらな変化を求めることはしたくない。そうした良さを維持できるような形で、市民の幸せを模索していきたいというのが、私の考え方です」（河上市長）

熊野市には平成27（2015）年～令和3年末までに97世帯166人の移住者があった（11世帯33人はUターン者）。そのうち、熊野市がUターンした移住者を対象に調査した「移住決意の理由」を見ると、移住者たちの思いはおおむね、これまで述べてきたような、世界遺産もある地域資源の豊かさ、スポーツ環境の良さ、そうしたことが

ら派生する暮らしよい環境、子育てに最適な環境などのポイントを挙げている。

さらに、河上市長の談話にある新聞への投書内容と一致する「外来者を快く受け入れてくれる地域の人の温かさ」なども、移住者たちの高い好感度につながっていることが分かる。

いたずらな変化より、市民の幸せを第一に考え成長を図りたいとする河上市長のゆとりある姿勢は、そういう意味合いからも今後、熊野市の持続可能なまちづくりにつながる、推進力の一つになっていきそうな予感がする。それこそはまた、市域全体の高齢化率が44%を超え、限界集落が幾つあっても、常に明るい《幸福感》に包まれているかのような、熊野市の「魅力の源泉」の一つになっているのではないだろうか。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和4年9月29日）



熊野古道・松本峠から遠望する七里御浜の景観は熊野古道・伊勢路ルートのまさにハイライト